

水辺視察に参加して

森脇 昭子

1. はじめに

ひと口に「自然環境」といっても様々な種類があるが、人間活動との関わりによって以下のように大まかに分類することができる。

①原生自然…人間活動の影響を受けない原生状態の自然（例：原生林、無人島）

※日本では薪炭文化やタタラ、マタギ文化が広がっていたため、人為が全く加わらない原生自然是僅かで、ほとんどが原生自然に近い状態の「**原生的自然**」である。

②二次的自然…人の手が加わることによって形成・維持された自然（例：里地里山）

③人工的自然…人の手により再生・創出された自然（例：学校ビオトープ）

昨年度は「②二次的自然」である棚田環境を視察したが、今年度は「③人工的自然」に該当する2カ所の水辺視察に参加した。

2. 現地視察

①斐伊川・木次水辺の楽校

雲南市木次町地内を流れる斐伊川に平成13～15年度にかけて整備された、「遊び・観察・憩い」をテーマとした身近な自然体験の場である。散策路や親水護岸、自然石のベンチのほか、樹木の生えた中州や竹林、水深の浅い水路などが整備されている。



写真1 斐伊川・木次水辺の楽校

整備後約十年が経過し、土砂の堆積等により中州や水路の形状は変化し、河岸に植栽された樹木も生長して、整備当初の姿からは徐々に変化しつつあるが、意図された機能自体は概ね維持されているものと思われた。

中州や河岸の樹木には鳥の群れが飛来しており、水路にはカワムツ等の稚魚やアカハライモリが見られ、水際に繁茂したヤナギ類の陰が水生生物の生息場となっているものと考えられた。また、晩秋の寒い日であったが、散策する親子連れや高齢者の姿が見られたほか、近くの幼稚園児童が毎年水辺を利用しているとの情報も得られ、幅広い世代の地域住民に利用されている様子が伺えた。

中でも印象に残ったのは当該地の維持管理状況であり、延長約500mの広い河岸の堤防から水際までがきれいに草刈されており、花壇には花々も見られた。親水施設の恒常的な利用と持続可能な維持管理は不可分であることから、清掃活動や美化活動などの地域の取り組みがここでの重要な役割を果たしていると言える。

②宍道湖浅場造成地

宍道湖湖岸では、湖沼環境改善を目的とした浅場造成やヨシ植栽が行われている。地区毎に株植えや植生マット、竹ポットなどの様々な試みが行われており、モニタリング調査も継続されている。

ヨシの仲間には、止水域の水際に生えるヨシと流水域の水際に生えるツルヨシ、大型で陸域に生えるセイタカヨシ(セイコノヨシ)の3種があり、いずれも宍道湖周辺で見られるが、このうち現在植栽されているのはヨシである。地区によっては活着したもの・流出したものなどであったが、所々にセイタカヨシの生育も見られた。本種はヨシよりも高い場所に生育することから、造成地を近くで確認できない場合でも、その分布状況から地形の状況をある程度推測することができる。

このセイタカヨシは、鳥類や昆虫類等への効果はヨシとあまり変わらないものの、陸域に生育するため水質浄化機能は望めず、また草丈が3~4mと高くなるため道路沿いに繁茂すると湖面が見えなくなるなど、当該地で目的とする効果は果たせない。近年、宍道湖に限らず県内河川や道路脇など至る所でこのセイタカヨシをよく見かけるようになったとの印象を受ける。牛の餌料に草刈り等が行われなくなったために、伐採圧に弱い本種が生育しやすくなつたことが原因ではないかとの話を伺ったことがあるが、宍道湖の場合、昔のヨシ類の分布状況や利用状況がどうであったかなどを併せて考察できたら興味深い。

3. 観察を終えて

人工的自然の場合、「再生」なのか「創出」なのか、「再生」であればどの段階の自然環境を再生・復元するのか、「創出」であれば何を目標とするのかなど、到達点の設定の仕方によってずいぶんと様相が変わってくる。また、人為的介入が大きい=人間活動に近い場所で行われることが多いことから、身近な環境整備として親水性や啓発的な意味合いを持つ場合が多い。

このため、原生(的)自然や二次的自然の場合は今ある良好な自然環境を保存(保護)または保全していくことがそのまま生物多様性の維持に繋がるのに対して、人工的自然については一段階置いて考える必要がある。

地域特性や自然の変遷の経緯等を踏まえた上で、再生・創出する自然の姿を明確にするとともに、維持管理や普及・啓発など広範の視点を持って取り組むことで、人工的自然も生物多様性を構成するより重要な要素のひとつとなるものと思われる。



写真2 宍道湖浅場造成地